

蓮田修吾郎の生涯

— 金属造型の开拓者 —



記念講演

「父の思い出」 蓮田沙千代氏

8月17日(火) 14:30より
金沢ふるさと偉人館 3F講座室

平成22年
7月24日(土)～9月5日(日)

金沢ふるさと偉人館

〒920-0993 金沢市下本多町6番丁18番地4 TEL(076)220-2474

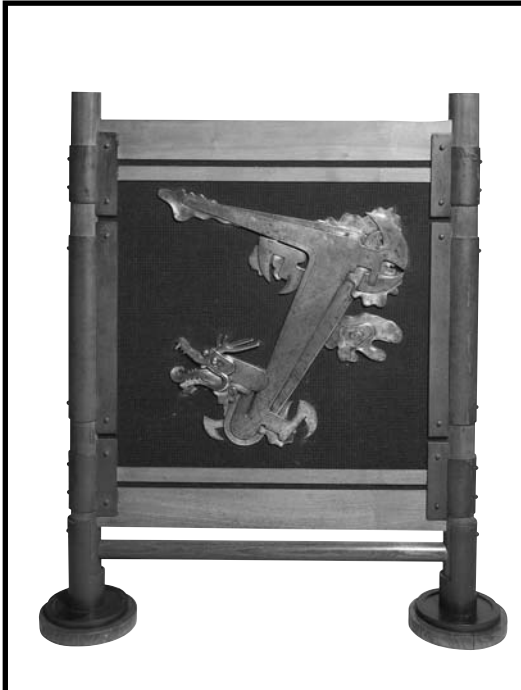


龐銀壺「山かけ」
龐銀鑄物

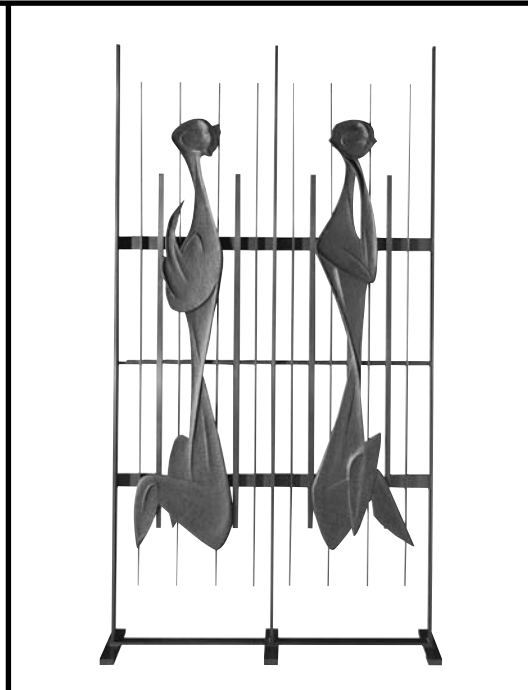
入館料

一般・大学生…300円
65才以上…200円
団体(20名以上)…250円
高校生以下…無料

金沢の(県立工業学校)時代にはもっぱら絵画に打ち込んでいたが、上京(東京美術学校工芸科鑄金部に入学)してからは立体的な構成に興味を持つようになり、彫刻に非常に心を魅かれて、当時帰朝したばかりの清水多嘉示の彫刻が好きになっていた。そこで下宿の近くにアトリエを借り、同じ金沢出身の板坂辰治と一緒に彫刻の制作をした。仲間達はここをアトリエ村と称して夜の更けるのも忘れて彫刻談義に熱をあげたものである。ブールデル、マイヨールなどに傾倒し、高村豊周の兄、光太郎の著書「ロダンの言葉」を愛読したり、ロダンの芸術を生み出させるヨーロッパ文明の大きさと深さに感嘆しながら、迫りくる芸術的興奮に血を湧かしたのもやはりこの頃であった。(『黄道への道』より)



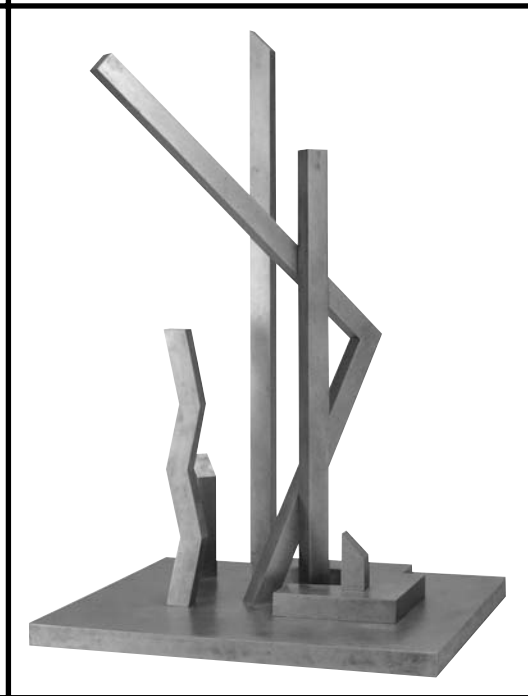
龍斑スクリーン
白銅鑄物、鉄、木



鑄銅浮彫
「追憶スクリーン」
銅鑄物、真鍮



朱銅壺「佇立」
朱銅鑄物



石川県知事
中西陽一氏顕彰
モニュメントマケット
ステンレス

(昭和21年)満州から引揚げてきた私は、学生時代から描いていた「建築との接点を持った金属造型」という構想をいつも温め続けていた。現実には、古い伝統をもつ当時の芸術大学の中では、旧態依然たるアルチザン的な技術伝承の教育しか行われず、この型にはまった技術は日進月歩の金属産業界からは置き去りにされた状態になっていた。新しい材質、新しい技術、製造工程などが次々に開発されていたが、美術教育の場からみたら、それは別の世界のことのように見えた。新素材や新技術を取り入れれば、従来の材質や技術では作り得なかった造型も可能になるはずである。(『公共の空間へ』より)